

離乳食作りに対する母親の意識と知識の検討

宮 腰 由起子

要 約： 離乳食指導として現在指針とされている「離乳の基本」が発表された当時に比較して、近年は有職女性の増加や少子化現象などの家族内容の変化・電子調理器具の普及・外食産業の発展やベビーフードの販売増加などに象徴される食生活環境の変化などの“社会的変化”に加えて、離乳食を作る当事者である母親の調理能力や食意識・食知識の変化（低下？）が指摘されている。さらに育児情報の氾濫やアレルギー性疾患患者・患児の増加など、“母親と子供自体の変化”も大きい。こうした状況下で、離乳食に対する母親自身の意識や知識を把握し、より適切な離乳食の指導方法を検討することは意義深い。本年度は、既存文献の中から、「離乳食に対する母親自身の意識や知識」のこれまでの動向を把握し、次年度の調査の作成準備を行った。

見出し語：離乳食作り，ベビーフード，母親，意識，

<はじめに>

「母親の『離乳食作り』」が近年変化しているとすれば、それに関わる要因として、①有職女性の増加・少子化現象など家族内容の変化、②簡便な電子調理器具やシステムキッチンの普及・スーパーや外食産業の発展・ベビーフードの販売増加などに象徴されるような食生活環境の変化、③育児雑誌の発行増に代表される育児情報量の増加などといった“A社会的変化”や、

④母親の調理能力や食意識・食知識の変化（低下？）、⑤アレルギー性疾患患者・患児の増加などの“B母親と子供自体の変化”が考えられる。

そこで今回は、現在の「離乳の基本」が出された昭和55年(1980年)から今日までの国内における既存文献の中から、離乳食に関わる母親の意識や知識について検討し、これまでの動向を概観した。また、それらの文献結果の確認のため

めに、小数ではあるが、妊婦や母親を対象に離乳食についての考え方を把握する簡単な質問紙調査を実施した。その結果も併せて報告する。

<方 法>

1 文献検討 :

①1979~1986年までの文献は、日本家政学会発行の索引誌「日本家政学文献集(第4集)」に拠った。

検索は、E 児童学/II 保健・III 育児保育教育およびF 食物学/IV 食生活その他に分類された文献を用い、「離乳食、離乳」が題名に記入されたものを探った。

②1981年以降の文献は、J I C S T にアクセスし、1992年12月までに登録された文献を検索した。「リニユウ、リニユウシヨク、シヨクセイカツ、ハハオヤ、イシキ、チョウサ、コウドウチョウサ、ニユウジ」のキーワードで検索した。

2 質問紙調査 :

千葉県内のK市の協力を得て、1992年8月に行われた1歳半健診来所の母親81名(回収55名)と、同9月の母親学級参加妊婦70名(全数回収)を対象に、ベビーフードと離乳食に関する質問紙調査を実施した。

<結 果>

1 文献検討 :

①題名に離乳食または離乳とある文献は11題あり、文献欄に一覧した^{9~11)}。その他、乳幼児の栄養、食生活、栄養指導などをうたった文献も20題余に過ぎなかった。

この11題の中で、母親の指導や意識が主題と

されたものは4題で^{9~11)}、いずれも水野清子氏を中心とした日本総合愛育研究所のグループの発表であった。

②一方、J I C S T によると、キーワードと自然語による検索では以下の文献数であった。なお、数字は()内が自然語検索の場合である。

離乳 124(535)題、 離乳食 116(171)題、
食生活 0(2556)題、 乳児 10331題、
母親 0(3896)題、 意識 (3756)題、
調査 (38243)題、 行動調査(20)題

「離乳または離乳食」【1】は 222(637)題であるが、【1】の中で「乳児」がキーワードにあるものは92題であった。さらに【1】の中で「食生活」を含むもの【2】は17題であったが、その【2】の中で「乳児」がキーワードにあるものは6題にすぎなかった。

一方、「母親または意識または行動調査」【3】は7469題あるが、【1】の中で「調査」を含むものは38題であり、「母親」を含むものは14題であった。この14題は全て「調査」に含まれていた。この中でさらに【2】をも含むものは2題に絞られた^{12, 13)}。

以上のように、これまでの文献では、離乳食時期の母親の意識を正面から調査したものは、必ずしも多くはなく、大部分は調査内容の項目の一部分に取上げられている状況であった。それらが含まれる調査の多くは、離乳食の内容や開始時期などに主眼が置かれていた。また、指導方法などに着目した調査もみられたが、実施時期や対象者、指導者の構成などが主体で、母

親の認識や指導方法の差異などへの言及は少なかった。こうした中でも対象者が多数で、母親や指導者などの内容へ踏込んだ調査をされていたのは、照査へのあるのは、前述した愛育研究所などの報告^{12, 13)}であった。

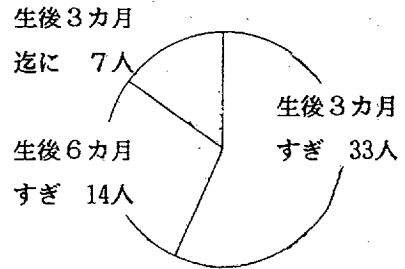
2 調査 :

1歳半健診来所者の母親54名中で、離乳食を「手作りした」母親は7人(13%)にすぎず、その中で全くベビーフードを使用しなかった者は1人(14%)であった。即ち純粋に「離乳食を手作りした」母親は1人という結果で、98%の53人の母親は何らかのベビーフードを使用経験があった。また、利用したベビーフードの内容は、素材物よりは調理済みの品物を挙げた者が35人(65%)と最も多く、使用時期は離乳食初期が24人(44%)と多いが、どの時期も同じように利用した者も16人(30%)であった。

なお、離乳食開始時期は、33人(61%)が生後3カ月過ぎ、14人(26%)が6カ月過ぎに始めていたが、7人(13%)は生後3カ月までに開始していた(図1)。

一方、初妊婦70名中、離乳食を手作りしたい者は38人(54.3%)とようやく半数を越えたに過ぎなかった。また、ベビーフードの使用については55人(78.6%)が考えている状況であった。

なお、医療従事者からベビーフードについて指導を受けたと認識していた妊婦は1名しかおらず、ベビーフードに関する情報は「育児書」(7.1%)、「育児雑誌」(30.0%)よりも「広告・宣伝」(37.1%)や「スーパーなどの売り場」(65.7%)から得ていた。



N=54

図1 離乳食を開始した時期

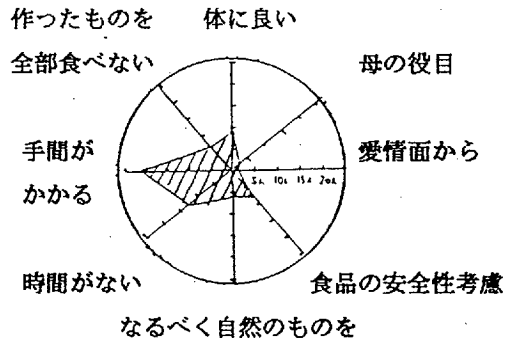


図2 離乳食を手作りにした・しなかった理由

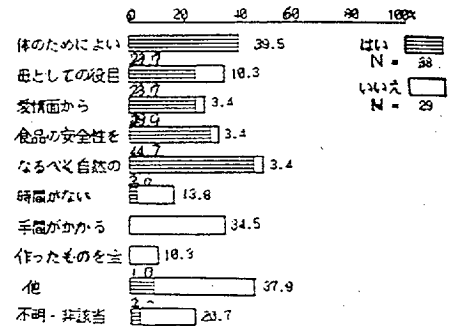


図3 「離乳食は全部手作りにしたいですか」

表1 離乳食指導についての希望

- 1) 大人のおかずの応用方法を教えて欲しい。
 - 2) 与える時期、内容、量について "
 - 3) ベビーフードの応用料理を "
 - 4) 離乳食の本を紹介して欲しい。
 - 5) 専門家の話を聞く場を設けて欲しい。
 - 6) 調理実習をして欲しい。
- (具体的に見てみたい。)

<おわりに>

以前に園田ら(1974)¹⁴⁾が東京、福岡で行った実態調査では、「離乳食はできるだけ自分で作って与えたい」とした者が約80%で、「市販品は使いたくない」が約35%を占めていたが、既に細貝ら(1987)¹⁵⁾の調査ではベビーフードの利用が64.5%に達し、丹羽ら(1989)¹²⁾、水野ら(1991)¹³⁾、宮腰ら(1992)¹⁶⁾や今回の調査などでは、使用者が8割を越え、母親における年次変化が明らかだった。これらから、今後の離乳食の指導においては、ベビーフードの使用についての内容を十分に含む必要が確認された。

なお、母親がイメージする「手作り離乳食」は、素材から吟味して最初の調理から手作りというものではないようである。また、「離乳食」のイメージには離乳準備期にすでに与えるジュースも含まれているようで、今後の調査や指導では、こうした「用語」の使用には注意する必要があると示唆された。

次年度は、これらをもとに、母親の意識・知識・行動とそれらに関わる指導側の要因を調査し探求する予定である。

<文 献>

- 1) 飯島久美子 他：沖縄県離島における離乳食の実態調査成績・母乳分泌の一促進法 第2報，小児保健研究，38(4)286，1979。
- 2) 赤松正根 他：早期離乳に関する研究，小児科臨床，33(11)2343-2348，1980。
- 3) 伊藤長生：本邦市販離乳食と食品添加物—その変遷と意義—，小児科臨床，33(11)2349-2363，1980。
- 4) 原田節子，山本妙子，武藤静子：離乳のすすめかたに関する研究—栄養指導時にみられた便秘について—研究第4部，愛研紀，17/69-76，1981。
- 5) 鈴木治子：地域の食習慣と離乳食の指導，周産期医学，12(7)980-984，1982。
- 6) 浜里啓子：地域の食習慣と離乳食の指導，周産期医学，12(7)985，1982。
- 7) 二木 武：離乳と離乳食—咀嚼の発達的視点から，小児科臨床，46(1)31-35，1983。
- 8) 水野清子 他：日本各地保健所における離乳指導の実態，第I報 設置主体別保健所における離乳指導状況の比較，第II報 離乳指導の現場からみた“離乳の基本”の検討，小児保健研究，43(1)46，1983。
- 9) 山本初子，水野清子，山内 愛 他：離乳期における魚に対する意識調査—第1報 離乳期におけるたんぱく性食品の使用状況—，愛研紀，20/103-114，1984。
- 10) 水野清子，山本初子，山内 愛 他：離乳期における魚に対する意識調査—第2報 母親の白身・赤身・青皮魚に対する区分及び児に与えている魚種とその調理法—，愛研紀，20/125-134，1984。
- 11) 水野清子 他：離乳期乳児をもつ母親の魚に対する意識調査，小児保健研究，44(1)49，1985。
- 12) 丹羽洋子 他：離乳期の食生活に関する研究(第3報) 食生活の実態と母親の意識について，小児保健研究，48(2)147，1989。

- 13) 水野清子, 染谷理絵, 西川寿子 他: 乳幼児の栄養・食生活指導に関する研究, 愛研紀, 27/91-98, 1991.
- 14) 園田真人 他: 市販離乳食に関する意識の調査研究, 臨床栄養45;55, 19741.
- 15) 細貝益男: 離乳指導—事例からの考察—, 福井県立病院医学研究誌, 2:51, 1987.
- 16) 宮腰由紀子 他: 妊婦におけるベビーフード利用の意義と実態, 日本公衛誌, 39(10・特別付録);730, 東京, 1992.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:離乳食指導として現在指針とされている「離乳の基本」が発表された当時に比較して、近年は有職女性の増加や少子化現象などの家族内容の変化・電子調理器具の普及・外食産業の発展やベビーフードの販売増加などに象徴される食生活環境の変化などの“社会的変化”に加えて、離乳食を作る当事者である母親の調理能力や食意識・食知識の変化(低下?)が指摘されている。さらに育児情報の氾濫やアレルギー性疾患患者・患児の増加など、“母親と子供自体の変化”も大きい。こうした状況下で、離乳食に対する母親自身の意識や知識を把握し、より適切な離乳食の指導方法を検討することは意義深い。本年度は、既存文献の中から、「離乳食に対する母親自身の意識や知識」のこれまでの動向を把握し、次年度の調査の作成準備を行った。